

『権威と権力 シェイクスピア、ハーバート、ダン』

曾村 充利

(英米文化学会第 42 回大会講演 日本大学 2024 年 9 月 7 日)

<はじめに>

ヨーロッパは、宗教改革後によって、カトリックとプロテスタント勢力に分裂し、各教会が対立し、内乱や戦争が勃発していた。

教会の分裂は国家の分裂を意味する、危機の時代であった。

当時のイングランド国内にも深刻な分裂があった。

英国国教会の主流派であり保守派であるアングリカンがいた。イギリスの再カトリック化を目指すローマ・カトリック（イエズス会）と、過激な改革（伝統の廃止・排除）を目指すピューリタンたちがいた。（穏健なピューリタンも沢山いた）

その中で、エリザベス女王は、寛容な中道政策と、包容主義（教義を減らして多様な多くの者を国教会内部に包容すること）によって、社会の分断を防ぎ、秩序と平和を守ろうとした。（エリザベスの宗教解決）

王の神性（王権神授説）と受動的服従のドグマにより英国国王の権威を確立した。

国教会は、対立を回避するため、信仰の問題を理性によって論じることを避けた。

シェイクスピア、ジョージ・ハーバート、ジョン・ダン等の諸作品には、アングリカニズムの立場の擁護が様々な形で表現されているのを見出すことができる。

近代人は英文学をシェイクスピアを非キリスト教的に見てきた

（1）シェイクスピアの信仰・思想の不明説

シェイクスピアの信仰に関しては、カトリック説、プロテスタント説、特別な宗教的宗派には属さない説、無神論者。どれも決定的な証拠はない。ジョンソン博士は、シェイクスピアは普遍的人間類型を描き、特別な主義主張を持たない「ただ楽しみのために読まれるの」と言う。

（2）従来、シェイクスピア国教会徒説が強かった

生涯（1564-1616）を、エリザベス女王とジェイムズ一世の国教会の時代に生きた。教区教会で洗礼を受け、死後、教会内陣に埋葬された。イングランド守護聖人聖ジョージの祝日（4月23日）に生まれ同じ日に死んだとされる。シェイクスピアはイングランド国民精神の表現とされてきた。

（3）1990年代後半からカトリック説が強まった

根拠は、父親は宗教改革以前の世代。他に教育面等の要素。ある人物が「彼 [シェイクスピア] はカトリックとして死んだ」と残している等々。シェイクスピア作品にはプロテスタントの教理と調和しないことが多い。『ハムレット』では煉獄から亡霊が来る。煉獄はカトリックの創作。

（4）ロマン主義批評（18世紀末～19世紀初め）がシェイクスピアを偶像化して、非宗教化した

コウルリッジは「宗教の聖美な真理が詩の姿を取って我々に黙示された」等々と言う。この文学的創造力の視点が20世紀のリベラル・ヒューマニズム的な非歴史的解釈と、それに基づくシェイクスピアの

普遍的価値を強調する批評の源流の一つ。現代シェイクスピア批評は、ロマン派の非キリスト教的・世俗的解釈の影響下にある。「シェイクスピアは（ユゴーがそうなりたいと切望したような）人間としての神であった。」（H. Bloom）

（5）1970年代以降、唯物論的批評がシェイクスピア崇拝を否定した

「われわれはもはや偉大さに対する敬虔なる崇拝行為に戻る必要はない」「現代のシェイクスピアの読者を新しい刺激的な方向に駆り立てる可能性が最も高いのは、後期資本主義の歴史的独自性への政治的コミットメントである」（F. Jameson）。唯物論者は「シェイクスピア的現象と聖典が社会的に構築されたものであることを圧倒的に証明した。」シェイクスピアの唯物論的解釈の典型：グリーンブラット『暴君 シェイクスピアの政治学』は「自由社会は…『国民の利益を考えずに私利私欲に走り、国のためにはなく自分のために』政治を行おうとする者を排除する仕組みになっているはずなのだ」という、十六世紀の暴君殺害論者ブキャナンの引用から始まり、最後は「人民がいなくて、何が街だ」というシェイクスピアの引用で終わる。

（6）しかしエリザベス朝とジェームズ朝イングランドは完全にキリスト教社会であった

「宗教の信仰と礼拝が、圧政的な教会＝国家によって気の進まない人々に強要されていたと考えるのは間違いであろう。……説教は一般の人々に最も人気のある娯楽であり、演劇と同じくらいの人気であった。ポールズ・クロスやセント・メアリーズ・スピトルでの野外説教は、誰にも出席の義務はないが、やはり国王や廷臣や庶民を等しく含む数千人の聴衆を集めていた。宗教は、政治から家庭まで、学校教室からパブまで、地理から医学まで、歴史から農業まで、生活のあらゆる面に浸透していた。この社会の一員としてシェイクスピアは自然に宗教的思考、聖書中の人物や物語、教会の典礼儀式、人々の信仰の実践に興味を持っていた。」（Hamlin）

（7）宗教改革で英国国教会（アングリカン・チャーチ）の成立

ルターの宗教改革の後、1530年代にヘンリー八世のイングランド宗教改革。プロテスタント英国国教会（アングリカン・チャーチ）が成立。宗教改革以降の信仰の分裂が、現代にいたるまで政治、思想、文学に大きく深い影響を与えてきた。

（8）国教会は二つの極端な信仰告白：ピューリタンとカトリックに挟まれていた

宗教改革以降のイングランドは二つの極端な信仰告白〔カルヴィニズム（ピューリタン）とカトリック（イエズス会）〕に挟まれていた。アングリカニズムは、宗教改革以来の分裂の超克をつねに課題とする保守的人間のアイデンティティとなる。

（9）英国の宗教的対立の図式：カトリシズム、アングリカニズム、ピューリタニズム

<カトリシズム> 保守の岩盤。絶対的権威。西ヨーロッパを支配した。ローマ法王の無謬性。伝承。集合知・伝統的聖書解釈。スコラ神学。共同体と教会は一体（暦、七秘跡）。教会による聖書＝神の独占（ラテン語訳聖書と儀式）。一生教会に包まれた人生。個人の自由がない。

<宗教改革> ルター（1517-）。プロテスタンティズム。反ローマ・カトリック教会運動。

<プロテスタンティズムの三原理> 「聖書のみ」「信仰のみ」「万人牧師説」（ゲルマンのナショナル

ズム。印刷術)。ローマ教皇の権威の拒否。個人が聖書を読めば(神との対話)キリスト教徒になる⇒教会は不必要。中世教会の誤りと墮落(教皇、煉獄、免罪符等)を批判。

<ピューリタン> 改革派。穏健派から極左まで。国教会内部に留まる者と分離主義者。カルヴィニスト(二重予定説)。反主教制(⇒長老主義)。ローマ法王はアンチ・キリストと信じた。摂理。英国教会に残るカトリック的要素(儀式、神学等)の撲滅を目指し批判・攻撃した。時に倫理的、勤勉、禁欲的、清潔、鈍重、シリアスで排除的。説教と聖書研究重視。

<アングリカン> 国教会保守派。主流派。カトリックとプロテスタントの中道(via media)。寛容的。包括的。国王至上法・礼拝統一法(エリザベスの宗教解決、1559年)を擁護。簡素で清潔な初期教会を理想とする。絶対的権威と過激な改革双方を嫌う。他教会(ローマ・カトリック、ルター派等)も普遍教会の肢として認める。自然法(アリストテレス⇒トマス⇒フッカー)。対立回避のため神学論争を嫌う⇒厳密な定義を避ける。俗人(国王)が国教会の長となる(反神権政治)。寛容主義(Toleration)的というよりも包容(包括)政策(Comprehension)的(対外政策として国内の統一を優先)。信仰の領土帰属主義(cujus regio, ejus religio)。契約説、共和主義、人民支配等の思想と闘った。

(10) ジョージ・ハーバートの宗教詩「英国の教会」カトリック、ピューリタン、アングリカンの見方

「素晴らしい容貌は、慎ましやかな装いに身をつつみ、／貧粗に過ぎず、きらびやか過ぎることもなく、／いずれの人がいと望ましいかを 示してくれる。／他国の女たちの風貌など 比べものにもならぬ。／というのも 彼女らはみな 着飾りたてるか／さもなくば 衣装も着けてはいないのだから。／丘の上に立つ女は、彼女に抛って 栄達を／望む輩をすべて みだらにおびき寄せるが、／自らの飾り立てた祭壇へ／あまりに久しく 接吻をしていたために／その顔までが、接吻で照り映えている／当然の報いとして。／谷間の女は、身を装うのに臆病すぎ、／髪の毛は耳のあたりに／垂れさがる。／隣の女の驕慢を 遠ざけつつも／この女は ひたすら逆の方へと突っ走り、／身には 何ひとつ飾らない。／でも、こよなくいとしい母よ、この二人の女が逸したものを／中庸こそは、おんみの栄光 我らの賛嘆的、／それは 幾久しく続きましょう。／神の 崇められませんことを、／御恵みで二重に濠をめぐらして 他ならずおんみをば／護り給うたのは、この神の愛でした。」 (2-5連)。“The British Church”

(11) ピューリタンはカルヴィニズムの二重予定説を信じていたが、国教会は万人救済説と自由意志説

二重予定説では、救われる人間と地獄に落とされる人間は既に神によって決定されている。人間はそれを決して知ることができない。ピューリタン牧師は予定説を説き続け人々は恐怖し絶望した。しかし国教会は徐々により寛容な、万人救済説と自由意志説を採用した。アルミニウス主義的。

(12) アングリカンは人間の外面を重視する。共同体的信仰。善い行いは救いにつながる。

アングリカンは人間の外側を重視する。(権威に従順、教会、儀式、伝統、慣習、善い行い、チャリティ、社交性、礼節、丁寧な言葉遣い)。善行を積むことに意味があるという考え。

(13) ピューリタンは内面を重視する。個人的信仰。「すべての者 [ピューリタン] は、だれもが彼

自身の心の中で言葉によって、神を知ることができると信じており、そして良心の内なる声が神の声であると信じていた。」(Haller)。祈りと内省で「『お前の罪は許された』という聖霊の声を良心の中で聞くまで止めてはならない。」自分が正しく救済を確信している。[ケンブリッジ・プラトニスト⇒理性と信仰の一致。ユニタリアン。アメリカ哲学≡外側(教会、伝統、社会、学校)に左右されてはならない。エマーソンの self-reliance。自己肯定。反順応主義。ハリウッド家庭映画。Forrest Gump。世俗化⇒欲望の開放。]

(14) 倫理的なピューリタン改革派の時代。穏健派と過激派がいた。

ピューリタンは多くカルヴィニズムの二重予定説を信じた。聖書の再解釈を通して保守派に挑戦した。ピューリタン牧師の予定説の説教は人々を恐怖と不安に叩き落した。道徳的腐敗や罪な行いを駆逐できないコミュニティには神の復讐があると信じるピューリタンも多く、終末論を熱狂的に信じて最後の審判に近いと考える者も多かった。アングリカンは福音書をよく読むが、ピューリタンは旧約聖書とヨハネの黙示録をよく読んだ。ピューリタンは伝統教会を批判し、法王はアンチ・キリストと信じた(17世紀中頃まで)。(チャールズ一世が英国を再旧教化を目論んでいるという陰謀論⇒悪魔化⇒扇動⇒テロと暴動⇒内乱⇒革命⇒国王処刑)。契約と人民主権による共和主義へ。ホッブズは保守派からクロムウェル派に転向し『リヴァイアサン』を書いた。自己保存⇒万人の万人に対する闘争。平等な自然権と契約説⇒個人は契約で権利を政治体に譲渡し公共権力で個人を守ってもらう⇒絶対王政擁護の理論。自由のない全体主義。ピューリタンは帝国主義者か?クロムウェルは内乱後、保守派の大虐殺を許可しなかったが、アイルランドに侵攻しドロヘドの大虐殺等。[名誉革命(1688)のオレンジ公ウィリアムはダッチ・ピューリタンで、アングリカニズムが理解できず、イギリスはプロテスタント傾向が相当程度強まる(ホイッグ)⇒摂理思想⇒イングランドは新エルサレム⇒選民思想と愛国心⇒国民は神の戦士⇒英版マニフェスト・デスティニー(puritan ideology)⇒カトリック・フランスとの長い戦争[トリーは反対した]⇒帝国主義]

(15) ローマ・カトリック(イエズス会)からの国教会攻撃

カトリックは、トリエント宗教会議で対抗宗教改革(反プロテスタント)の理論武装。エリザベスの破門。神学論争。カトリック勢力の北部反乱。女王暗殺計画。スペインの無敵艦隊(二度)。イエズス会士の渡英宣教師をフランスの Douai college(英カトリック教徒の養成基地)から送り込みイングランドの再旧教化を目論んだ。殉教カルトの増大(Edmund Campion)。

(16) 国王殺害理論(tyrannicide)の台頭(カルヴィニストとイエズス会双方から)

古典時代からある反乱思想。スコットランドのカルヴィニスト、ブキャナンは国王殺害理論で有名。イエズス会の暴君殺害論は対抗宗教改革の中で必要となった。「暴君については、いかなる臣下も公然と暴力を用いてだけではなく、陰謀と虚偽をもってしても殺害することが許され、かつ殺害しなければならない。」チャールズ一世処刑。ミルトンはブキャナンを称賛し、クロムウェルも国王殺害理論を承知。

(17) 諸教会の妥協のできない対立の根には信仰告白があった

信仰告白とは各宗派の信仰の神学的立場を明確にした文書。「西洋キリスト教圏は信仰告白の形態の

違いによって分裂し、その結果信仰のみならず精神、文化等、他のすべての面での分裂が加速度的に起こっていた」(高柳)。

(18) しかし英国国教会は⇒非告白主義。神学上の対立を避けるため信仰告白を持たなかった

国教会は信仰の問題を理性で議論することを嫌った。信仰告白を持たず、神学論争を避け、組織神学を持たない。国教会の三十九箇条は告白主義ではない。「ピューリタンの告白主義が直接無媒介的個人主義的性格の強い『あれか、これか』(either/or)の信仰を生み出したのに対し、アングリカンの非告白主義は間接媒介的聖餐共同体的色彩の濃い『あれも、これも』(both/or)的教会を形成した」(八代)のである。「無関心ごと」「中立無規定事項」adiaphora, things indifferent)

(19) エリザベス女王は中道政策 via media の包括性で国を治めた

「エリザベスの宗教解決 (Elizabethan settlement)」(礼拝統一法と国王至上法)。ヴィア・メディア政策。包括的政策。エリザベスは、人々に教会への外面的な服従だけを求めた (“I would not open windows into men’s souls” [Francis Bacon の証言])。ジェームズ一世 (1603-25) も中道政策を継承。法制化し、国王の権威と権力を維持した (⇒アナーキーの阻止) が、現実には、混交政体 (国王、貴族院=エスタブリッシュメント、庶民院=大衆、の間のバランス) で国を統治した。常備軍を持たなかった。包括的、寛容、妥協的な中道政策を取った。少ない宗教的拘束 (神聖政治の阻止)、世俗的法律 (コモン・ロー)、少ない税金 (Magna Carta)。制限王権論 (絶対王政化の阻止)。King-in-parliament。

(20) 神学者リチャード・フッカーはエリザベスの中道政策の擁護の書『教会統治理法論』を書いた。アングリカニズム思想の生みの親 (1554?-1600)。包容主義的。宗教改革以後の、自然と超自然、理性と信仰、人間性と堕落、聖書と伝承、統一と寛容、議会と王政などの対立・分裂において、どちらか一方を否定せず、矛盾と緊張を孕んだまま両者を受容する。教会分離主義的ピューリタンに国教会内に留まるように説得する意図を持つ。

(21) エリザベスの統治下、国内で 40 年以上海外で 30 年戦争がなく平和と繁栄を謳歌した。中庸政策の統治を、絶対王政と規定できるかどうか。エリザベスは人の良心の問題に立ち入るのを嫌悪した。

「秩序ある社会を維持することは、まだキリスト教会なしでは想像することができず、その教会は信条と礼拝を同じくする単一の包括的な組織を持つもの以外は考え難かった。……エリザベスの方針は少なくとも見せかけの統一と教会体制を維持しながら、同時に彼女の統治を破壊しないことにあった。彼女が何よりも望んでいたのは、イングランド女王であることと生き延びることであった。……彼女は常識があったので、国民が同様に生きることができ、できる限り干渉が少なく日常通りの仕事をするのが許されるのであれば、国民は彼女の望むことを許すのを知っていた。……彼女が必ず強く要求した唯一宗教に関する試験手段は、教会の統治者として彼女へ忠誠を自発的に誓うことであった。」(Haller)

(22) シェイクスピアのエリザベス女王の治世の称賛

歴史劇『ヘンリー八世』でクランマーは次のように予言する。「真実が姫の乳母、／神聖にして神々しい祈りが姫の顧問官です。／姫は敬愛され、畏怖されるでしょう。姫の民は姫を祝福し、／敵は風に打たれる麦畑の穂のように震えおののき、／悲しみに打ちひしがれます。姫のご成長に連れて／善もま

た増し広まり、そのご治世には、／人々はみな自ら育てた葡萄の木陰で／心置きなく食事をし、隣人たちと共に／平和の歌を朗らかに歌うでしょう。／神は真に崇められるでしょう……」『ヘンリー八世』V, iv, 23-36.

(23) 英文学者ダウデン「国教会の統一は理論ではなく、有機体の統一であった」

「カルヴィニズムは国教会の見解と和解できないことを、最近の教会史学者によって私たちは確信している。…… [エドモンド・] バークはどこかで、革命期のフランスの憲法屋連中の『拙劣な深遠さ』について語っていた。理論というものは、カルヴィニストであろうがアングロ・カトリックであろうが、精巧で独創的かもしれないが、しかしこの世の予測不可能な複雑さに比べれば拙劣なものであろう。対抗する教義が、教義が必然的にそうなるように厳格になるがままにさせておけば、妥協は実際成立しない。」

(24) 多義的な解釈を許す人々。エラスムス、モンテーニュ、フッカー、シェイクスピア

「例えばエラスムスはその折衷主義的な豊かさのために捉えどころがなく明確に把握することが非常に難しいため、ルターは彼をウナギと呼んだ。驚くほど曖昧なカルヴィンの神学はフッカーの神学の多くの部分を形成した。そして、とりわけモンテーニュはジョン・フローリオの翻訳 (1603 年) ……。これらの [思想的に] 特定することができない有名人たちに、私はシェイクスピアの名前を加えたい。すべての中で最も特定できない人物である。私たちはリチャード・フッカーをこれらの仲間の中において理解すべきだと考える。」カルヴィンのカルヴィニズムの違い。

(25) 抽象化による非人間化、演劇

人間は神ではない。ゆえに不可謬な教義、信仰告白 (= 人間の言葉) は存在し得ない。国教会は、人間が書いた (= 抽象化した) 信仰箇条があらゆる人間的状況に対応すると考えなかった。

ある政治学者によれば、「二つ [演劇と政治] とも、その程度まで思考の様式であり、抽象化の様式でさえある。しかし私たちはまた、この二つにおいて、すべての起こり得る状況を超越すること、そして迂遠な状況性それ自身を超越することは、同時に人間であることを止めることになるのを知っている。」

(26) シェイクスピアは信仰告白の絶対化と戦った。Betteridge は、「『冬物語』の結末は、『空騒ぎ』の二回目の結婚場面と同様、作品中で、シェイクスピアが、悔恨と人々の知恵を結びつける教会を心に描き出している瞬間の一例である。その過程で、信仰告白の徹底化 (“confessionalization”) の拘束は事実上退けられており、自分たちの現状が『物語の問題』であることを受け入れる、全ての者に開かれている教会のイメージが上演されているのであり、それがキリスト教社会である」と言う。そして「シェイクスピアの劇は、首尾一貫して告白主義の絶対説の危険と戦っている。その危険とは、いつも権力を持つ男性の登場人物によって明確に表現されている、世界をすべて作り変え、完璧に整然とした秩序を持ち明快で説明された世界を作り出したいという信心深い欲望である。これらの『信心深い』 (“Godly”) うそ偽りのない男たちに対比されているのは、ボトムやポーリーナというような人物であり、彼らはまったく異なったエートスを表している、それはジョン・ダンのごた混ぜの現実そのままの教会により近い。このエートスは、人生の回心を抱擁しているばかりではなく、その物語をキリスト教的生の唯一の

真の基盤とみなすものである。シェイクスピアの教会理解の中心にあるものはこれである。ハーバート・マッケイブは、「私たち人間の生は、演じられた物語（“narrative”）に在るのだから、私たちの聖なる生は、神の演じられた物語へ私たちが参加することにすぎない。私たちに對する神の啓示は、その物語の中へ私たちが救い上げられることに他ならないのであり、その人間の物語が秘跡であり、あるいは見られていないもの、そして見えないもの、つまり不可解な神の姿なのである」という。ボトムは、この神の言説へと救い上げられることを、夢のような神秘体験の瞬間と理解していた。シェイクスピアのエリザベス朝及び初期ジェイムズ朝教会との関係は、いつもボトム、ポーリーナあるいはマリーナのような登場人物の物語や語りをとおして伝えられるものであり、彼らは、物語をおこなう空間を創作することで、キリスト教共同体を出現させるのである。」

例えば、夢から覚め人間の姿に戻ったボトムは次のように説明をする。シェイクスピアはボトムの夢が啓示的な体験であったことを暗示している。「何ともけったいな夢を見たもんだ。確かに夢だ、だがどんな夢かは人間の知恵じゃ言えないな。この夢を説明しようとするやつは、とんまなロバだ。どうやら俺は俺がなんだったか、言えるやつはいない。でも、どうやら俺は一人で、ここんどこについていたのは一何がついていたか言おうとするやつはド阿呆だ。人間の目が聞いたこともない、人間の耳が見たこともない、人間の手が味わったこともない、舌が考えたこともない、心臓が言い伝えたこともない、あれは前代未聞のとんでもない夢だった。」

（27）ジョン・ダン「聖なるソネット 18」：ダンの誰にでも開かれた、包括的な国教会のイメージ。
ダンは、「優しい夫よ、あなたの花嫁を隠さず見せて下さい。」と言い、**理想の教会は地上には存在しないことを示唆している。**「愛するキリストよ、あなたの花嫁の美しく清らかな姿を、／私に見せて下さい。ああ、それは海の向こうで、派手な／装いをしている女でしょうか。それとも、奪われ裂かれ、／ドイツやこの国で、嘆き悲しんでいる女なのでしょうか。／あなたの花嫁は千年も眠り、時には新しく、ときには古く／なるのですか。今昔、将来、どこに住むのでしょうか、／一つの丘の上、七つの丘の上、それとも、丘のない処に。／彼女は我々の中に住むのか、それとも、冒険を愛する／騎士のように、旅をして探し、言い寄るべきでしょうか。／さあ、優しい夫よ、あなたの花嫁を隠さず見せて下さい。／そして、私の魂があなたの鳩を求めるのを許してください。あなたにとって彼女が最も貞淑で、好ましく思えるのは、／最も多くの人に抱かれて、その素肌を見せるときなのです。」

（28）ダンの包括的思想⇒言葉で教会を型にはめない。他の教会を否定しない。

ダンは次のように書いている。「私は宗教という語に足枷をはめたり、幽閉したことはありませんし、修道士のように真直ぐに正したこともありません、……また、それをローマ、ウィッテンベルク、ジュネーヴなどに閉じ込めたこともありません。それらは全て事実上一つの太陽から来た光線なのです。」ある論者は言う。「彼 [ダン] は、若者や年寄り、結婚する者や、実業に就いている者たち、そして自分たちの選りや救済の確証に関して、信仰上の疑念や良心の咎めによって苦しむ人々に、沢山の、しっかりとした忠告を与えた。数多くのピューリタン神学者たちによる過酷なカルヴィニズムの教義によって苦悩する、これら小心な魂にとり、彼の論じ方よりも情け深く、あるいは賢いものはあり得なかったであろう。」 ecumenism

（29）シェイクスピアは合理主義者と正反対である（オークショット）

「彼〔合理主義者〕には経験の蓄積という感覚がなく、経験が一つの定式に転換されている場合にそれを受け入れる用意があるに過ぎない。過去は彼にとって邪魔物としての意味しかもたないのである。彼には（キーツがシェイクスピアに帰した）消極的能力（negative capability）がまったく欠けているが、これは、焦って秩序と明確さを探し求めることなく経験の不思議さと不確実さを受け入れる力であり、経験を支配下に置く唯一の能力である。彼はリヒテンベルクが消極的情熱（negative enthusiasm）と呼んだ、あの現実に生起するものにたいする親密で詳細な享受の性向を欠き、一般理論が出来事の上に被せる大まかなアウトラインを認識する能力のみをもつ。」

（30）シェイクスピアと理性と信の問題。信仰には理性に背いてまで信じようとする努力が必要「悪魔の声と理性は当惑するほど類似して見えるのである。……フッカーがここで暗示していることを理解するためには、愛する人に対する信頼を粉々にしてしまう証拠を私たちの目の前でひらひらさせる者の名前として、「セيطان」を「イアーゴー」に入れ替えると分かりやすくなる。……イアーゴーの理性へのまことしやかな訴えと証拠が、妻を愛する雄々しい男の心を毒していくように、セيطانが徐々に沁み込ませる、同様にまことしやかな疑いが、神の預言者をして『律法は〔私たちを〕見捨てる』と確信させてしまうのである。シェイクスピアのアナロジーは、なぜ証拠に背いて信じるのが、フッカーにとって必ずしも自己欺瞞ではなく、さらになぜ信念を維持することが恐ろしく困難であるのかを明確に説明している。」（Schuger）

（31）シェイクスピアは抽象的思弁を避けて秩序を求めた。人々は一致して正統な権威を弁護した。「シェイクスピアは本質的にアリストテレス主義者であるからであり、彼にとっては、政治、道徳、礼節そして市民社会は、一つの有機的な統一体を互いに補強し合う諸要素であったのである。」「彼ら〔イギリスのヒューマニスト〕は、抽象的な思弁を弄するよりは、むしろ実際的な問題に対処する機会が多かったのである。このような一般的態度は、あえて反啓蒙主義とも、また思想を欠いた愚直とも見なすことができよう。だがそれほど悪く言う必要はない。もしイギリス人が一致して正統な権威を弁護したとすれば、それは本質的に、ヨーロッパのヒューマニズムの体制と一致するものだからである。」「個人の、そして国家の破滅の第一の階梯は、まず、アリストテレスを疑問視することであった。」（D. Bush）アリストテレスの倫理学⇒人間は社会（ポリス）的動物⇨普遍の人間性⇨性善説⇨人々は共同体の中で互いに協力して暮らす。自己犠牲ができる。

（32）権威の理論的支柱：王権神授説と受動的服従：チューダー朝以後のオーソドキシイのドグマ。宗教改革で英国国教会の長となったヘンリー八世の権威がローマ法王の下位ではあり得なかった。この時国教会に王権神授説と受動的服従が導入された。王権神授説の理論は、（1）戴冠式で聖油を塗られた国王の権威と権限は神から与えられた、（2）世襲は覆せない、（3）王は神にのみ責任を持つ、（4）非抵抗と黙従は神から課されている。しかし現実には、エリザベスは常に王国全体の同意を得るよう配慮し、混合政体論（バランス）や議会内国王 King-in-Parliament という発想を受け継いだ国王であった。

（33）「受動的服従」（passive obedience）は国教会の本質的特徴の一つでありドグマであった。エリザベス女王の、相次ぐ暗殺陰謀事件、北部反乱、旧教復活の策謀、破門、レベラーズ等に対する恐怖心などに深い根を持つ。聖書の注釈と説教によって「社会的に高位の人々への謙虚さ、尊敬心、服従

そして恭順は、説教壇からのメッセージであり続けた。」

(34) シェイクスピアの王権神授説の表現の一例

ジョン王は、ローマ法王に次のように告げようと命令する。「世の領土内では余のみが神に次ぐ最高の首長であり、 /従って、神に次ぐ者である余が統治するところでは、/余のみがいかなる人間の助力も得ずに/偉大にして最高の権威を保持する」『ジョン王』(III. i. 155-8) ダンカン王に対するマクベスの答えもまた王に対する完全なる服従の典型。「忠勤こそが臣下としての私の務め、それを果たせば/すでにご恩賞にあずかったこととなります。 陛下のお務めは/臣下の忠誠をお受け下さること。臣下の忠誠とは/陛下には子として、国家には僕としてお仕えすることで/ございます。臣下はなすべきことをなすのみ、/敬愛する陛下のご安泰のためとあらば何をいといましよう。」『マクベス』(I. iv. 22-27)

(35) シェイクスピアの権威観

『トロイラスとクレシダ』でユリシーズは、関係性の欠如から不服従そして果てはカオスとなると指摘する。狂った弦の不協和音を聞いてみると言い、「正義がなくなり人々が欲望にのみ込まれ、序列が息の根を止められるとき、そのあとに続くのはこうした混沌だ」と説いている。「序列を取り去り、弦の調子を狂わせ、/どんな不協和音が生じるか聞いてみるがいい。あらゆるものが/ただ対立するばかりだ。 陸との境を知っていた海は/岸辺よりも高くその胸を押し上げ/この固い地球をふやかして呑み込んでしまう。/強力な者が謙虚な者を支配し、/乱暴な息子が父親を殴り殺す。/力が正しさとなる、いや、むしろ正不正は/その名を失い区別がつかなくなる。両者の果てしない葛藤を/裁くはずの正義もまた名前をなくしてしまう。/こうしてあらゆるものが力に取り込まれる。/力は意思に、意思は欲望に取り込まれるのだ。/そして万人の胸に潜む欲望という狼は/意志と力との二重の後押しを得て/万物を餌食にせずにはおかず、/ついには自らも食い尽くす。偉大なるアガ멤ノン、/序列が息の根を止められるとき、/そのあとに続くのはこうした混沌だ。」『トロイラスとクレシダ』(I. i. 109-124)
the great chain of being

(36) 権威が社会の分裂を防ぐ。権威の崩壊⇒正義の崩壊

哲学者 R・スクルトンは上の引用箇所について言う。「彼 [シェイクスピア] が書いたことは洞察を含んでいる。権威の崩壊は正義の崩壊を意味している。権力は再び世界に野放しとなり、合理的な意志から本能的欲望へと自身を粉碎していき、結果として社会の分裂が始まるのだ。既存権力組織の目的は、分裂を防ぐことにある。この故に、私たちは権力から権威へと戻らなければならない。」 [正義(価値)を定義することは不可能。自分が正しい(ピューリタニズム?)とすれば無数の正義があることになる。]

(37) ダンの国への忠誠心の弁護を試みている。宗教は私的な良心の問題であり政治的服従と衝突すべきではないという。「信仰上の二項対立(カトリック/プロテスタント)に分裂する代わりに、 ダンは、臣民の政治的忠誠を個人的な良心に優先させることで、体制順応主義者と国教忌避者という世俗的な二分法を構築している。「ダンは、多くイエズス会に激しい批判を集中する一方で、また非国教徒プロテスタントをも攻撃している。これによって、ダンが結果的にカトリシズムとプロテスタンティズムの間で引き裂かれていたと結論付ける必要はなく、またダンの信仰の根の深い両義性を示していると読まれる必要はない。」(Shanym Altman) 「ダンは国家への服従を弁護して、宗教は私的な問題であり

政治的な服従と衝突するべきではないと、臣民たちに説得している。」「ダンは、カトリック教徒とプロテスタントを、国家への外面上だけの政治的服従という共通の集合場所に、包含しようと努めた。」「ジェームズ一世は国家内の統一の重要性を力説し、『統一があらゆるものの完成である』と公布した。…ダンは、しかしながら、教会の統一は単一の地上の組織のみに包含されることは不可能であり、それは国家と教会と個人の良心が一点に集まるところに — 衝突するところではない — 見出されるはずだと主張する。この点に関しては、国王も法王もキリスト教の統一の場所を作っているわけではない。というのもこれらは全体に寄与している一つの構成単位でありそれゆえ共依存関係にあるからである。」(Altman)。「『偽殉教者』は、まず第一に、王権神授説の擁護の書であり、絶対主義ではない。」(E. Shuger)。

(38) ダンは『偽殉教者』の序文で『第一の明快な研究領域と目的は [キリストの] 教会の統一と平和である』と書いている。そして聖なる君主の概念を次のように説明している。「神が面倒を見られるのは人間の全てであって魂だけではない。それゆえ神が最初に造られたものは肉体であり、そして最後のお仕事はそれに神の栄光を授けることであろう。神は、私たちの肉体と財産の面倒を見るために、医者そして法律家と同様、私たちを君主だけに渡されたのではなかった。また私たちの魂の面倒を見て吟味するために、聴罪司祭同様、司祭にのみ渡されたのではなかった。そうではなく、司祭は、私たちが地上の生活で社会のために徳高く罪なく生きるように努力しなければならないのであり、君主は、法によって私たちを天国に至る道から逸れないように努力しなければならないのである。というのも、このようにして彼らは「王の系統をひく司祭」(Regale Sacerdotium) を完成するからである。両者が両方のことをするとき完成するのである。というのも、私たちは両者にとって羊であり、そして彼らは多様な関係で互いに羊だからである。」

(39) 少なくない批評家が、シェイクスピアはアングリカンであると示唆する

その表現は様々である。「キーツの消極的能力 [不確実なものや未解決のものを受容する能力]の神学上の対応物」、「エラスムスの世界教会主義 [教会再統一]」、「包容」、「妥協主義」、「寛容と宗教的平和主義」、「極端に走らない宗教改革」、「反ピューリタン」、「教義上のミニマリズム」、「福音伝道上の思慮深さ」等々。「シェイクスピアと近代初期イングランド演劇はいずれも、そのようなエラスムスの平静から、『すべての人に対してすべてのものになりました』と言うパウロから見習ったのである。」I have become all things to all people so that by all possible means I might save some.

(40) しかしある論者は、上のようにシェイクスピアを包括的アングリカンとするのは「なまぬるく」聞こえると言い、シェイクスピアに完全なる包括はなく、批判を教えたという。「……彼の劇は、終始一貫、中道から逸脱し、そのようなものがある振りをするほど素朴ではありえず、ましてや推薦する中道など無いことは言うまでもない。悲劇作品の終局は共同体とはいえないのである。喜劇作品の終局は誤解の余地なく共同体であるが、しかしこのゴールに、真の寛容あるいは完全なる包括をとおして到達した喜劇作品が一つでもあるだろうか。……最後にもう一度言えば、私は、彼の劇は批判的な問いかけを教えたのであり、……私たちに、教義ではなく、教義の価値の検討方法を教え、問題というよりも方法を私たちに教えているのである。」(Leinwand) シェイクスピアの宗教性の否定論者は、分けることが不可能であるはずの劇的展開と包括的解決の二つを切り離し、別のものとして論じようとする傾向

があるように思われる。

(41) 反対に、齋藤勇は、シェイクスピア劇は「諸矛盾」を暴露したが、また「ゆるし」が存在していると言う「とにかくシェイクスピアは臭いものに蓋をしようとするような道徳家ではない。ありのままに人生を描いて、真相を知らせる realist である。従って人間残忍な悪事を暴露するときも、遠慮なく真相をあばいて実情を明らかにする。それと同時に、『慈悲の心は無理には湧かない。』(The quality of mercy is not strain'd,) (Merchant of Venice,) 云云というあの名高い一節をも我々に与え、かつ As You Like It の公爵や Tempest の Prospero には、我々から見れば不自然と思われるほど無造作に、今までの横奪者を寛恕させることにしている。」

<おわりに>

シェイクスピア劇の解決、赦し、慈悲、モラルの説明として、当時のアングリカニズムの中道や包括や共同体を示唆することが「なまぬるい」印象を与えるのはもつともである。「中道」も「包括」も批判的視点からは、定義の回避、徹底的思考(理性)の放棄、不完全な構築による妥協の産物となる。

しかし一旦、現実世界の政治と宗教の現実を見るとそれは「なまぬるい」世界ではない。イングランドは内と外から敵に囲まれていた。大陸の宗教戦争、覇権国スペイン、「神の軍隊」イエズス会の渡英宣教師、カルヴィニストや非国教徒過激派、プロパガンダの戦いがあり、内乱と戦争、教会分裂とアナーキーがいつ現出しても不思議ではない状況であった。またエリザベスの後継者も未定であった。

シェイクスピア劇はこの社会の危機への不安と緊張を共有する観客の前で上演された。中庸と包括という政策の「なまぬるさ」がこれらの危機に対処するためのイギリスと国教会の究極の選択であったという視点を排除して、シェイクスピア劇を理解することは妥当であろうか。

エリザベス(およびジェイムズ)の政治と教会の政策とシェイクスピア作品それ自体は、両者ともに戦略として包括を利用して成功を収めたと考えられないであろうか。エリザベスは包括政策によって教会分裂を防ぎ、様々な熾烈な現実の危機的局面を乗り切り、長期間にわたる平和と秩序と繁栄を実現した。

同様に、シェイクスピア作品の「人間の残忍な悪事を暴露」し「遠慮なく真相をあばく」、矛盾し葛藤に満ちた劇的展開は、多く最後の包括性によって分裂が回避され大団円を迎えている(悲劇作品の結末は確かに共同体的ではないとしても)。観客は「慈悲は強いられて施すものではない」というポーシャの一言に、人間のあるべき姿を見て心を打たれ、拍手喝采し劇場に通り詰めたのではなかったのだろうか。

信仰の分裂とそれが惹起する内乱を意識し身構えるイングランドの人々が、聖なる国王の権威と正義を支持することによって、秩序と平和が保たれたのである。そういう時代があったことに対する想像力が求められるのであろう。シェイクスピアやハーバートやダンはその危機意識のなかに生きていたのであり、英国の保守的で中庸、包括的で寛容な政治と宗教のありかたを深く理解して、神学論争や政治パンフレットの言葉ではなく、文学の表現を通して擁護したのだといえるのではないだろうか。